

三重県志摩町布施田方言の音便形とバ四・マ四動詞

丹羽 一 彌

0 はじめに

三重県志摩町は志摩半島南端から西に向かって伸びる小半島の部分であり、布施田地区はその中央やや東寄りにある。志摩町などは、三重県の方言区画では「志摩・南伊勢方言」の領域に入るが、この辺りには「志摩弁」というような広域の方言意識はない。地形が複雑なリアス式であるためか、ことばは、村ごと、浦ごとに異なるという意識である。こうした志摩地方の諸方言の中でも、志摩町布施田方言の五段活用型動詞の音便形は極めて特徴的である。しかし志摩町の音便形については、語例がいくつか紹介されている程度で、動詞の音便体系全体を記述したものはない。

本稿では、まず志摩町布施田方言における五段型動詞音便の体系を記述し、次いでバ行とマ行動詞について、室町時代の口語や現代の諸方言と比べながら、枠組みの特徴をやや詳しく述べる。

本稿のためのインフォーマントは次の2名である。

浦口 恵子 大正14年生まれ

春木 てい 昭和2年生まれ

1 志摩町布施田方言の音便形

² 布施田方言の五段型動詞の種類は、共通語などと同様に、カ、タ、ラ、ナ、ワ、サ、ガ、バ、マの9行に活用するものがある。

五段型動詞に～タ・～ダ等が接続する形を「音便形」とし、その末尾がイ・ン・促音であるものを「イ音便」「撥音便」「促音便」とする。「ウ音便」の形は、その後の音変化のために、成立当初の形と現在の形とが一致しないものもある。本章では共時的な記述にとどめるので、音便形末尾の母音とその長短で説明すべきかもしれない。しかし次章以下で言及する歴史的研究や各地の記述的研究に合わせるため、最初から「ウ音便」という用語を使用する。またそれぞれの五段型動詞も、先行研究に合わせて、「カ四」「タ四」など歴史的用語で略称する。ただし「ナ変」と「ハ四」は使用せず、「ナ四」「ワ四」とする。

志摩町布施田の伝統的な音便形は以下のようである。

1. 1 三重県内の周辺地域と同じもの

カ四、タ四、ナ四、ラ四の音便形は共通語や周辺の他方言と同じである。

カ四	〈書く〉	カイタ	カイト	カイトル	イ音便
タ四	〈勝つ〉	カッタ	カッテ	カットル	促音便

ラ四 〈割る〉 ワッタ ワッテ ワットル 促音便
 ナ四 〈死ぬ〉 シンダ シンデ シンドル 撥音便

上記の他に、タラ〈たら〉、タリ〈たり〉、タル〈てやる〉、テク〈てゆく〉などが後続するが、どれが接続しても同じ形であるので、以下では～タ・～ダの形で代表させる。また調査した範囲の語で見る限り、アクセントの型によって音便の形が左右されることはないので、アクセントは無視する。

ワ四は近畿周辺部の諸方言と同じである。全部がウ音便の形で、語幹1拍の語は語幹末の母音が長く、2拍以上の語は短い。

ワ四 〈買う〉 コータ 〈食う〉 クータ 〈酔う〉 ヨータ
 〈笑う〉 ワロタ 〈震う〉 フルタ 〈思う〉 オモタ

サ四も近畿周辺部の諸方言と同じである。ほとんどがイ音便の形で、語幹の長さや語幹末母音は関係がない。調査した語のうち〈蒸す〉と〈話す〉がイ音便形にならなかった。

サ四 〈出す〉 ダイタ 〈干す〉 ホイタ
 〈放す〉 ハナイタ 〈隠す〉 カクイタ 〈残す〉 ノコイタ

1. 2 三重県内の周辺地域と異なるもの

ガ四、バ四、マ四は特徴的な形となる。以下のような音便形は志摩町周辺の調査報告や文字化資料などにも見当たらない。その地理的な範囲は極めて狭いと思われるが、分布については未調査である。

まずガ四は全部撥音便である。これも語幹の長さや語幹末母音は関係がない。ガ四の撥音便形は、県外の方言に見られることはあるが、この地域では志摩町内以外には見られないようである。本稿ではガ四についてこれ以上触れない。

〈嗅ぐ〉 カンダ 〈注ぐ〉 ツンダ 〈剥ぐ〉 ヘンダ 〈脱ぐ〉 ノンダ
 〈跨ぐ〉 マタンダ 〈濯ぐ〉 ユスンダ 〈泳ぐ〉 オエンダ 〈騒ぐ〉 サオンダ

次は次章で問題とするバ四とマ四である。バ四では、語幹2拍以上の語は原則としてウ音便であり、語幹末母音が短い。しかし語幹1拍語の〈飛ぶ〉と〈呼ぶ〉は、語幹末母音が同じオ（以下ではob-などと略記）でありながら、一方は撥音便、他方はウ音便で長母音の形である。この〈飛ぶ〉については後で取り上げる。

語幹末母音	語幹1拍語	語幹2拍語	語幹3拍語
ab-		〈並ぶ〉 ナロダ	
ub-		〈結ぶ〉 ムスダ	
ob-	〈飛ぶ〉 トンダ	〈運ぶ〉 ハコダ	〈喜ぶ〉 ヨロコダ
	〈呼ぶ〉 ヨーダ	〈遊ぶ〉 アソダ	
		〈転ぶ〉 コロダ	

マ四はバ四と同様である。マ四の例は多くあるが、〈ほは笑む〉などが生活語でないためにem-の例は用意できなかった。マ四では多くがウ音便であるが、um-で語幹1拍語だけが全部撥音便となっている。またam-の〈編む〉にはオーダとアンダの二つの形がある。アンダについても後で取り上げる。調査した語幹2拍語のうち、〈恨む〉〈摘む〉〈進む〉はウランダ、ツマンダ、ススンダという撥音便の形であった。

語幹末母音	語幹1 拍語	語幹2 拍語	語幹3 拍語
am-	〈編む〉 オーダ	〈摺む〉 ツコダ	
	〈編む〉 アンダ	〈挟む〉 ハソダ	
	〈噛む〉 コーダ	〈畳む〉 タトダ	
	〈止む〉 ヨーダ	〈刻む〉 キソダ	
im-		〈縮む〉 チジダ	
um-	〈汲む〉 クンダ	〈休む〉 ヤスダ	
	〈住む〉 スンダ	〈沈む〉 シズダ	
	〈積む〉 ツンダ	〈包む〉 ツツダ	
om-	〈飲む〉 ノーダ	〈頼む〉 タノダ	〈押し込む〉 ヘシコダ
	〈読む〉 ヨーダ	〈萎む〉 スポダ	
	〈揉む〉 モーダ		

マ四・バ四は同じ形であるから、整理すると次のようになる。語幹1 拍語では ab- am- と ob- om- がウ音便, ub- um- が撥音便である。語幹2 拍語は全部ウ音便である。

	語幹1 拍語	語幹2 拍語
ab- am-	ウ音便 (長母音 o)	ウ音便 (短母音 o)
im-		ウ音便 (短母音 i)
ub- um-	撥音便	ウ音便 (短母音 u)
ob- om-	ウ音便 (長母音 o)	ウ音便 (短母音 o)

語幹1 拍語 ab- am- と ob- om- は長母音であるから、ウ音便であることは明白である。2 拍語の ab- am- の形は、語幹末の母音連続アウがオーとなり、さらに短母音化した結果と考えられるから、これもウ音便として問題ない。問題は ub- um- と ob- om- である。〈結ぶ〉や〈頼む〉の音便形はムスダとタノダであるから、これだけではウ音便形の母音が短くなったのか、撥音便形のンが脱落したのか判断できない。特に ub- um- については、語幹1 拍語が撥音便であるだけに、2 拍語などをウ音便とするのは問題が残るかもしれない。しかし以下のことを勘案すると、ウ音便形の母音が短くなったものと考えてよい。

1 布施田では、マ四のウ音便2 拍語の短母音化など、短母音になりやすい。

2 布施田では、他の語を見ても、ンが脱落するという傾向がない。

ここではウ音便とするが、これについては次章でも考えることにする。

1. 3 布施田方言の音便形

以上、調査した範囲で規則的な例をまとめると、布施田方言の音便形は原則として次のようである。

イ音便	カ四	〈書く〉 カイタ
	サ四	〈出す〉 ダイタ
促音便	タ四	〈勝つ〉 カッタ
	ラ四	〈割る〉 ワッタ
撥音便	ナ四	〈死ぬ〉 シンダ
	ガ四	〈嗅ぐ〉 カンダ

	マ四 um-語幹 1 拍語	〈汲む〉	クンダ		
ウ音便 (長母音)	ワ四語幹 1 拍語	〈買う〉	コータ		
	バ四 ob-語幹 1 拍語	〈呼ぶ〉	ヨーダ		
	マ四 am- om-語幹 1 拍語	〈噛む〉	コーダ	〈飲む〉	ノーダ
ウ音便 (短母音)	ワ四語幹 2 拍以上の語	〈笑う〉	ワロタ		
	バ四語幹 2 拍以上の語	〈並ぶ〉	ナロダ	〈運ぶ〉	ハコダ
	マ四語幹 2 拍以上の語	〈畳む〉	タトダ	〈頼む〉	タノダ

1. 4 不規則な形

前節では不規則な形を例外として外した。例外はやはり例外であって、不規則な理由が説明できそうなものは、〈話す〉〈飛ぶ〉〈編む〉だけである。

まず〈話す〉の音便形を無理に求めれば、ハナシタという形になる。これがイ音便にならないのは、伝統的な方言形でないためである。日常の生活では〈言う〉ユータや〈喋る〉シャベッタを使っていて、〈話す〉は改まったときの語である。従って他の語と同じようにはならない。

次にマ四〈編む〉には、前章のように撥音便形アンダとウ音便形オーダの2種類ある。しかしこの2種類の形は全くの自由変異ではなく、はっきりした使い分けがある。藁で眷(ふご)など伝統的なものを編むときはオーダであり、毛糸でセーターを編むときはアンダである。このことから、一見不規則な形であるアンダは、セーターなどを編むような生活が一般化してから借用された、新しい共通語化した形であることが分かる。

共通語化と一口に言っても、個々の語の場合と文法現象の場合とは異なる。語の場合は方言形から共通語形へ形が交替すれば済むことである。しかし活用のような文法事象の場合は一定の範疇の中の全部の語形の交替である。バ四・マ四動詞という範疇の全ての語で一気に入り変化が起きることはない。まずある1語、あるいは〈編む〉のように1語の部分的意味に共通語形が侵入し、従来の体系から見ると不規則な語形が取り入れられる。こうして言語体系に「ほころび」ができ、それが徐々に他の語にも広がって「ほころび」が次第に大きくなる。これがある段階に達すると、その範疇に関しては別の形に変化(共通語化)したということになり、残った方が例外となる。

このような一定の範疇の中でのゆれ(活用形のゆれ)については、すでに糸魚川地方でのワ四動詞の音便形の例が述べられている(柴田1966)。布施田の〈編む〉オーダ・アンダの使い分けは、糸魚川のようなゆれが発生する前触れとなるものであろう。サ四〈話す〉のイ音便にならない音便形も、新たに共時的体系内に侵入した、変化(共通語化)を起こす芽であると考えられる。布施田方言の音便形の例外は、ある体系が変化を被ろうとするその前夜の姿を見せている興味深い例である。

〈飛ぶ〉については次章で室町時代の体系を見てから考える。

2 バ四・マ四動詞の音便形

本章では、布施田方言のバ四とマ四の音便形を取り出して、その特徴を考える。この問題

を考えるには、室町時代の口語や現代の諸方言も視野に入れた方がよい。

2. 1 室町時代のバ四・マ四音便形

室町時代の口語のバ四・マ四の音便には次のような原則があった（大塚1955）。

[A] 語幹末がウ列音なる時 撥音便

[B] 語幹末がアエイオ列音なる時 ウ音便

[a] 語幹一音節語（特に母音音節である場合）はそれぞれの原則よりはずれ撥音便となることもある。

[b] 前項により語幹末ウ列音語でウ音便となるものはほとんど語幹二音節以上の語である。

この [a] [b] の二傾向は抄物よりキリシタン物に著しかった。

この大塚説の [A] [B] を前章の布施田のように整理すると、次のようになる。

	語幹 1 拍語	語幹 2 拍語
ab- am-	ウ音便	ウ音便
ib- im-	ウ音便	ウ音便
ub- um-	撥音便	撥音便
eb- em-	ウ音便	ウ音便
ob- om-	ウ音便	ウ音便

上の表は、語幹 1 拍語で ub- um- が撥音便であることなど、布施田方言とほとんど同じである。室町時代口語と布施田方言のバ四・マ四の音便体系は、両者に極めて近い共通の祖体系から分かれたものであると考えてよい。

2. 2 現代諸方言のバ四・マ四音便形

布施田方言のバ四・マ四が周辺地域と異なる音便体系であるのは、この地で独自の変化をしたからではなく、室町時代以来の伝統を保持してきたためである。ただし ub- um- 語幹 2 拍語は、室町時代口語では撥音便であるのに、布施田方言ではウ音便である。この不一致が生じた原因は次のどちらかであろう。他に布施田方言もソの脱落した撥音便であるという仮定もできるが、前章で述べたように、布施田はウ音便だと考える。

1 両者に共通の祖体系で撥音便であったものが、布施田でウ音便化した。

2 共通の祖体系でウ音便であったものが、室町時代口語で撥音便化して文献に残っている。

この問題を考えるには、室町時代口語と布施田方言だけではなく、同じ「室町型」音便を持つ他の方言をも見る必要がある。以下で諸方言を見るが、本稿で扱っている布施田方言の音便形は、1999年現在、70代という世代に使われている語形である。それに対して、引用する各地の方言形は、先行研究に例の出ているものである。中にはかなり以前の調査によるものもあるので、現在その地でそういう語形が使われているかどうか確認していない。問題はあるかもしれないが、それらを並べて現代日本語の伝統的な方言形として扱う。

2. 2. 1 九州諸方言のバ四・マ四音便形

九州諸方言には動詞の活用ヤバ四・マ四の音便を詳しく記述した研究も多い。九州は「室町型」バ四・マ四ウ音便の本場である。大分県各地の方言では次のようになっている（糸井1959, 1961）（野林1969a）。

um-	語幹1 拍語	撥音便	〈産む〉	〈済む〉	〈汲む〉
ub- um-	語幹2 拍語	ウ音便	〈歩む〉	〈遊ぶアスブ〉	〈沈む〉
ob- om-		ウ音便	〈飲む〉	〈飛ぶ〉	〈喜ぶ〉
ab- am-		ウ音便	〈噛む〉	〈挟む〉	〈屈む〉
im-		ウ音便	〈惜しむ〉	〈力む〉	

まとめると、以下のように、布施田方言と同じである。

	語幹1 拍語	語幹2 拍語
ab- am-	ウ音便	ウ音便
im-		ウ音便
ub- um-	撥音便	ウ音便
ob- om-	ウ音便	ウ音便

『九州方言の基礎的研究』その他によれば、九州では広い地域でこれと同じ体系になっている。問題の ub- um- 語幹2 拍語は、佐賀県では長母音のままであるし（小野1983）、九州東部では ab- am- はオー、ub- um- と ob- om- はウーというように、開合の区別をしている地点も多いので、現代九州諸方言でウ音便であることは明瞭である。

2. 2. 2 近畿各地のバ四・マ四音便形

三重県の熊野灘沿岸地域は、アクセントだけでなく、文法でも興味ある地域である。奈良県南部も同様である。しかしこの地方のバ四・マ四の音便には、今まであまり関心が向けられなかったようである。「室町型」音便の体系はおろか、ウ音便の痕跡が残っている地域でさえ、捜すのは容易でない。志摩町はわずかの例がみられる程度である（榎垣1962）し、西宮(1962)には奈良県南部の語形が3例出ていて、「室町時代の有名なウ音便の残存である」とある。残存と断定してあるし、その通りであろうが、それ以上の例も論述もない。近畿周辺部の北部や西部となると、福井県若狭地方（佐藤1962）や兵庫県高砂市（和田1959）などにその痕跡が見られるようであるが、文字通りの痕跡であるらしい。

奈良県十津川村の状況は多少分かる。大島・平沢(1979)にまとめてある例を本稿のように整理すると、バ四・マ四の音便に関しては下のようになる。ただし ub- um- の語幹1 拍語の例が出ていないし、バ四・マ四は全てウ音便の形で出ていて、撥音便の形はないように述べてある。しかし同書の執筆者の異なる「資料一覧」には〈生む〉ウンダ、〈摘む〉ツンダなどが出ていて、アクセントなどの他の章では、アソーダと並んでアソソダなど語幹2 拍の語で撥音便の例も出ていて、詳細は分からない。下の表は〈生む〉ウンダなどで該当する部分を埋めたものである。

	語幹1 拍語	語幹2 拍語
ab- am-	ウ音便	ウ音便
ub- um-	撥音便	ウ音便

ob- om- ウ音便 ウ音便

十津川村ではわたりの鼻音が現れるので紛らわしいが、ub- um- 語幹 2 拍語の母音が長いことから、音韻的にはウ音便であると考えてよい。

2.3 ub- um-語幹 2 拍語について

九州諸方言と十津川方言のバ四・マ四の音便は、室町時代口語や布施田方言と同じ体系である。ただ ub- um-語幹 2 拍語は室町時代口語で撥音便、現代諸方言では全てウ音便である点は異なる。前述の二つの仮定に沿って考えれば、室町時代口語で変化したのか、現代諸方言で変化したかのどちらかである。

九州諸方言の ub- um-語幹 2 拍語のウ音便に関しては、この分野の専門家の間でも意見の対立があった。前田(1954)は、準文語と口語とを区別した独自の仮説を立て、「九州方言の現状は、右の如き法則が中央語の上に正しく行われていた時期、すなわち第十六世紀末葉の遺風であると見ることができる」と述べている。これに対して大塚(1955)は、前田説を否定し、「キリシタン物の動揺の行きついた一の姿であろう」としている。

抄物が近畿中央で、キリシタン物が九州で書かれたとすれば、変化は近畿中央か九州かである。二地域を比べるだけならば、上の議論でよい。しかし九州だけではなく、三重県志摩町や奈良県十津川村にも似た体系が見られる以上、近畿中央か九州かではなく、範囲を面として見なければならぬ。面を強調すると、かつて近畿中央で使われていた形が各地に残存している、と言語地理学的に解釈することになる。しかしこういう解釈は、個々の語形など言語記号の恣意性を前提にして成立することであり、ここで取り上げたような類推可能な文法現象にまで適用するのはやや問題が残る。

室町時代の口語、特に近畿中央では大塚説 [A] は安定しているようである。理由は、ウ音便化は語幹末母音の広いものから始まり、同一母音の連続(ウとウ)は許容されにくかったから(柳田1985)とのことである。しかし大塚説には [b] という傾向もある。[b] は、抄物の書かれた地域では原則遵守の意識が強く、キリシタン物の書かれた地域では緩いということである。語幹 2 拍語の大部分がウ音便であり、ub- um-のみが撥音便である場合、全体をウ音便で統一しようとする動きがあっても不思議ではない。文法の体系性を考えると、近畿中央の規範から遠い地域で類推変化が起きることは十分あり得る。

類推説に従えば、九州のウ音便形は、近畿中央のかつての遺風が現在も残っている(前田説)のではないかもしれないが、キリシタン物に見られることばのゆれが九州で一方の形に落ち着いた(大塚説)というような九州に限定されたものでもない。九州、布施田、十津川など、あるいは他の地域でも、各地で独立に変化したものの一部が、現在の九州や布施田などに残っているということになる。しかし離れた多くの地域で同一の変化があったことを論証するのは容易ではない。

共通の祖体系から変化したのは現代諸方言だと思いが、残念ながら断定するまでには至らない。それは力量不足のためもあるが、資料が不足しているからである。文献資料については素人であるから何とも言えないが、方言の方はまだ十分望みがあると思う。「方言文法全国地図」2の「飛んだ」と「飲んだ」に見られるウ音便形の領域以外でも、現実には本稿の布施田方言のような地点もあるし、丁寧に調査すれば現在でもまだ新しい資料が得られるは

ずである。諸方言の正確で体系的な記述が蓄積されれば、室町時代以来の歴史、現代諸方言の相互関係、ub- um-語幹2拍語の音便形などについて、ある程度のことは言えるようになるのではないだろうか。

2.4 例外〈飛ぶ〉について

布施田方言で〈飛ぶ〉は不規則語であり、ob-語幹1拍語であるにもかかわらず、撥音便である。〈飛ぶ〉には前述の〈編む〉のような新旧の使い分けはない。昔からの「人や蛙が跳ぶ」場合も、現代の「飛行機や人工衛星が飛ぶ」場合も、トンダである。

室町時代口語では、大塚説[B]の原則により、ob-の〈飛ぶ〉はウ音便となるのはずである。しかし実際は、前田(1954)や大塚(1955)にも触れられているように、平家物語などでも撥音便形であり、例外であった。原文は見えていないが、〈飛ぶ〉の音便形は「平家物語高野本」では8例全部が撥音便形であり(近藤他1996)、「天草版平家物語」でも撥音便8例である(江口1994)。〈飛ぶ〉は、口語資料以外の高野本でも、大塚説の適用される天草版でも撥音便である。文献資料ではウ音便になっていない。比較のために〈呼ぶ〉を見ると、高野本は6例、天草版16例全部がウ音便であり、こちらは原則どおりである。〈飛ぶ〉は、室町時代にバ四・マ四のウ音便化が起きたとき、ウ音便化を逃れたもので、当時から例外的な語であった。

布施田方言の〈飛ぶ〉は、撥音便形トンダであり、室町時代の口語と一致する。これは両者に共通の祖体系で例外であったものを例外のまま保持してきたからである。布施田で一度ウ音便化して〈呼ぶ〉などと同じ形になったものが、この語だけグループを離れて撥音便に戻るとは考えられないし、さらに、その結果が室町時代の口語の例外と一致するという確率はゼロに近い。この地にトーダという形は現れなかった。

ところが九州各地の〈飛ぶ〉を見ると、佐賀県ではトーダであり、大分県や宮崎県ではトゥーダやツーダなど開合の区別に沿った形になっているが、いずれもウ音便である。奈良県十津川でもウ音便である。「方言文法全国地図」2「飛んだ」で見ると、中国地方西部、高知県、九州など、本稿でいう「室町型」の体系を保存している諸方言の〈飛ぶ〉はウ音便である。青森県にもトダの地点があるが、この地方は「シラビーム方言」であって、共通語の撥音や促音に対応する部分が現れていない音便形が多いので(平山1982)、ここでは取り上げない。明治時代に調査された「口語法分布図」によっても、トーダ・ノーダの領域は「方言文法全国地図」2とほとんど一致している。これらの諸方言と比べると、布施田方言のバ四・マ四の音便の枠組みは、例外〈飛ぶ〉までが一致するという事実の分だけ、室町時代の口語あるいは祖体系に近いものである。

〈飛ぶ〉は、室町時代から撥音便であったし、現代の布施田でも撥音便である。諸方言でウ音便であるのは、各地で独自に変化したからであろう。反対は考えられない。布施田方言の撥音便形は、ウ音便化しなかった地域もあるという証拠として、貴重な例である。逆に見れば〈飛ぶ〉が九州や十津川でそれぞれ独自にウ音便化しているから、同様のことは他の語にも十分起こり得る。であれば、前節の語幹2拍語のウ音便化が各地で独自に発生した類推変化であるという蓋然性はさらに高くなる。

参考文献

- 糸井寛一（1959）「大分県大野郡川登村（新 野津町）」（『日本方言の記述的研究』）
- 糸井寛一（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 大分・宮崎北部」（『方言学講座第4巻九州琉球方言』）
- 岩本 実（1969）「佐賀県北山方言 文法」（『九州方言の基礎的研究』改訂版1991）
- 榎垣 実（1962）「三重県方言」「兵庫県方言南部」（『近畿方言の総合的研究』）
- 江口正弘（1994）「天草版平家物語の語彙と語法」
- 大島一郎・平沢洋一（1979）「文法の研究」（『周辺地域方言基礎語彙の研究－奈良県十津川方言を中心として－』）
- 大塚光信（1955）「バ四・マ四の音便形」（『國語國文』24-3）
- 小野志真男（1961）「方言の実態と共通語化の問題点 佐賀・長崎」（『方言学講座第4巻九州琉球方言』）
- 小野志真男（1983）「佐賀県の方言」（『講座方言学9九州地方の方言』）
- 近藤政美他（1996）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』
- 佐藤 茂（1962）「福井県嶺南地方（若狭）方言」（『近畿方言の総合的研究』）
- 柴田 武（1966）「言語地理学の寄与」（『言語史研究入門 日本語の歴史』別巻）
- 西宮一民（1962）「奈良県方言」（『近畿方言の総合的研究』）
- 野林正路（1969a）「大分県長湯方言 文法」（『九州方言の基礎的研究』改訂版1991）
- 野林正路（1969b）「熊本県深海方言 文法」（『九州方言の基礎的研究』改訂版1991）
- 野元菊雄（1959）「宮崎県西臼杵郡日の影町」（『日本方言の記述的研究』）
- 濱田 敦（1954）「音便－撥音便とウ音便との交錯－」（『國語國文』23-3）
- 平山輝男（1982）『北奥方言基礎語彙の総合的研究』
- 前田 勇（1954）「近古末におけるバ四マ四の音便事情管見」（『國語國文』23-9）
- 柳田征司（1985）『室町時代の国語』
- 湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』（風間書房1981）
- 和田 実（1959）「兵庫県高砂市伊保町（旧 印南郡伊保村）」（『日本方言の記述的研究』）
- 大阪教育大学方言研究会（1979）『志摩前島半島方言事象分布図集』
- 国語調査委員会（1906）『口語法分布図』（国書刊行会1986）
- 国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図』2